

28 折おりのうた

家にいれば旅を思い、旅にあれば家を想（おも）う。老人ホームに住む身には旅心地絶えることないでしょう。

山里に住む身は恋し道通る人にも犬にも心ひかるる

（神戸市・特養ホーム、万寿園）

寂しさに沈潜する心には、ものみなが深く語りかけてくれるようです。

夏雲の重なるごとく幸が来る

（特養・関生園、千葉チトミ）

関生園は岩手県の山間部で健闘しているホーム。心をむなしゅうして身辺を顧みると、この暮らしにも幸せは幾つもある。幸せよどんどん来て！と憧^{あこが}れもこめられています。

憧れなくてどうして人の世の生きられよう——ある詩人の言葉です。

お盆が近づくとホーム内は急にざわめきます。高齢者の心は一斉に家路をめざすからです。

盆帰省娘の言葉に心は満ちて泊まる一夜も千夜の如し（坂本常生）

わが家のごちそう任運荘にない味がする（三枝町子）

張り切って帰ったわが家も不自由で任運荘に帰りたいかな（衛藤房江）

家では車いすが使えず、納戸部屋に臥せたまま。座敷のにぎやかさが一層切なくなつたのです。

首藤カツさんの愛息は毎年、東京から帰省してともにホテルで数日を過ごします。任運荘の玄関に帰り着くと、老母が「やれやれ帰った」と一言。「母のその言葉でほっとしました」と息子さんの目が赤らむ。カツさんの句——せちいこと なーんにもないよ なんもない

盆と正月の帰省できる日以外の日は、毎日が待ちこがれる身です。それは



保育所訪問——関生園のある日。

家族の面会です。農繁期でも夜、野良着のままかけつける家族もあるが……。

わが家族は？ と中村フサさんは詠みました。

「百姓も していないのに
来ん娘」

後でそのうたを見た娘が「恥をかかせて！」と母を叱っていました。母娘だから出来ることです。

ホームの夜は早い。夜勤の寮母は二人だけになるからです。いわば早仕舞いです。夏

陽はまだ窓にある。「おむつもきれいになったし、ゆっくりお休み下さい」。お年寄り―「もう寝るんな?」。寮母は返事に窮します。

心は夜開きやすいのでしょうか。昼間は口をきかない三代ヒサ子さんは、おむつを換える寮母に、きまって歌うように聞きます。「いま何時な いま何時な まだ夜は明けんな―」―言葉はそのまま、うたです。良寛和尚の長歌を連想させます。

―この夜らの いつか明けなん この夜らの 明けはなれなば 女来て
はりを洗はむ こいまろび 明かしかねけり ながきこの夜を―

「はり」とは、ゆばり(尿)、こいまろびとは転げ回ること。晩年の良寛さんは慢性下痢の独り暮らしを苦しましました。

九十九歳の古庄トミさんも夜はとくに寮母の手を離さず、話したがりです。肺がんの痛みに顔しかめつつ、ぼつぼつと。

「なんちゅうてん一番せつかったんは、子供が二人戦死したことよ。なんぼ自分も死んだ方がいいかと思うたで」。

さらにぼつり、ぼつりと、

「人間はなあ、せつかったり、うれしがったりするのが、時の仕事じゃ。いちにいちにんの持ち前の苦しみちゅうもんは、自分でせにゃならん。せついからと、にちにちのことを、ひとに白状してんつまらんじやろう。心の芯じこらえるのが人間。他人にせつ顔みせぢやならん。時、時に、その苦を捨てるのが人間というもんで——」。

カーテン越しに聞いていたのでしょうか。津田さんが「今晚はさえているなあ……」と呟く。

感に堪えつつ礼深くして去ろうとする寮母に、なおも語り続けます。「あんた、お姑（かあ）さんと住んじよるんじやろ？　ここでせちいことがあったってん、家に帰ったら、せちい顔みせぢやならん。みんながせちいきな……」。話し終わって「なむあみだぶつ」と合掌。寮母に向かってしているのです。そしておむつを換えてくれたことに對しても。

借り物でない自分の言葉、それこそが詩です。人間賛歌です。